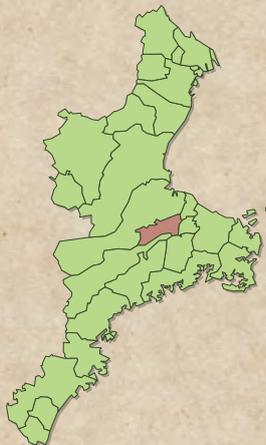


た き 多気町



- ① 街道
- ② 五桂池の話
- ③ 野呂元丈
- ④ 丹生の水銀
- ⑤ 条里制と地名の話

0 5km

歴史 街道

多気町

多気町には、昔から重要な街道が三つ通っていました。伊勢本街道いせほんと熊野街道くまのと和歌山別街道わかやまべつです。

伊勢本街道は、大和国やまとのくにと伊勢神宮いせじんぐうを結びます。初瀬はつせ（奈良県桜井市さくらい）を通るので、別名を初瀬本街道ともよばれました。この道はけわしい峠道とうげみちが続きますが、大和国と伊勢国を結ぶ一番の近道でした。

和歌山別街道は、紀州藩きしゅうはんの和歌山と松阪を結ぶ和歌山街道から分岐し、田丸たまるへ向かう道をいいます。伊勢参宮への近道であるとともに、和歌山城と田丸城を結ぶ道として重要でした。伊勢の人たちが、吉野よしのや高野山こうやさんへお参りする道でもあったため、別名を「吉野高野道」ともよばれました。

熊野街道は、野中のなかの追分おいはわけから女鬼峠めきとうげを越えて南の熊野へ続きました。平安時代に貴族の間で熊野詣くまのもうでが盛んになり、神秘的の国熊野は信仰の対象でした。伊勢信仰と結びつき「伊勢へ七度、熊野へ三度」といわれ、伊勢参宮のあと熊野へ足をのぼす人々が通りました。世界遺産に登録されている熊野古道の一つです。【→P98】



街道道標 (多気町教育委員会提供)

■ 街道の道標どうひょうには何が書かれてあるのか調べてみましょう。

歴史

多気町

ご かつらいけ はなし
五桂池の話

多気町には、五桂池という県内一の貯水量を誇る溜池があります。

江戸時代、新田開発が盛んに行われました。しかし、日照りや洪水などで不作が続き、村人たちは土地へ水を引くための溜池をつくってほしいと藩へ願い出ていました。ある日のこと、五桂村に田丸代官の高札が立てられました。高札には、「上五桂にかんがい用の大池をつくるので、そこに住んでいる者たちは早く立ち退くように」と書かれていました。急なことに村人たちは大騒ぎしました。しかし、その溜池はみんなのためになるものです。村人たちは涙をのんで立ち退くことになりました。村人は、朝長(多気町)・野原(度会郡大紀町)・富岡(度会郡玉城町)・相差(鳥羽市)・夏草(志摩市磯部町)などへ移り住み、その土地でも新田開発に努力しました。1672(寛文12)年から1678(延宝6)年の7年の年月をかけ、のべ152000人の人々の力で五桂池が完成しました。この池のおかげで、佐奈川流域は豊かな米作地になり、今でもその恩恵を受けています。



五桂池(多気町教育委員会提供)

- 五桂村の人々がとった行動について話し合ってみましょう。

人物

多気町

の ろ げんじょう
野呂元丈

江戸時代、本草学という学問がありました。本草学とは薬草を基本として、樹木・鉱物・動物など天然物全体にわたり種類・性質・分布や生態を研究し、記載する学問である博物学の基礎となったものです。本草学は、庶民の生活に役立つ学問として、なくてはならないものでした。

紀州藩主徳川吉宗が八代将軍になり、武芸と実学(実践で役立つ学問)が奨励されるようになると、多気町波多瀬出身の野呂元丈が幕府に取り立てられました。元丈は、幕府お抱えの本草学者として活躍しました。元丈は仲間と一緒に全国各地へ薬草採集に出かけ、草木を研究しました。元丈は医者でもあったので、病人にとっての薬草の必要性を十分に理解していたのです。



野呂元丈(多気町教育委員会提供)

また、日本最初の狂犬病に関する治療法を説いた医学専門書を著しました。47歳の時に、元丈は御目見医師(将軍に直接会える医師)に任用され、幕府の中で安定した地位を得ました。

将軍吉宗は西洋の学問に着目しますが、当時、江戸にはオランダ語を理解する幕府の役人はいませんでした。そこで吉宗は、青木昆陽と元丈にオランダ語の習得を命じています。二人は西洋の学問の研究をしました。これが日本の蘭学の始まりです。

【→P111*48】

- 蘭学にかかわった人として他にどんな人物がいるか調べてみましょう。

史跡

多気町

にゅう
丹生の水銀

多気町の「丹生」の地名は丹(に)を生む場所という意味で、全国的にみられる地名です。多気町の丹生からは、水銀鉱石の辰砂(朱砂、丹砂)が産出しました。「丹」は朱や赤色の顔料のことです。

朱や赤は縄文時代より使用され、古墳の石室内や神社の柱にも朱色が使われていることがあります。また、辰砂や、それからつくられる水銀は有毒ですが、薬としても使われており、古代には伊勢国から朝廷に献上されていました。

奈良時代には東大寺の大仏の金メッキの大部分に丹生水銀が使われ、約2tもの水銀が奈良まで運ばれました。古代から、水銀は高価なものでした。中世には、丹生に日本で唯一の「水銀座」が形成されました。『今昔物語集』には、水銀を扱う水銀商人の話が出てきます。近世には、水銀は伊勢おしろいの原料として、お伊勢参りの土産物として広く知られました。

しかし、その後、丹生水銀は産出量が激減していきました。今は地名と、水銀抗跡が残るのみです。



古代水銀抗跡 (多気町教育委員会提供)

- 『今昔物語集』に出てくる水銀商人の話とはどんな話か調べてみましょう。

地理

多気町

じょうりせい ちめい
条里制と地名の話

地名には昔の様子を表した名前が多く、多気町にもそうした地名が数多く残っています。

津田地区に、今も「三疋田」、「四疋田」の地名があります。古代には、「条里制」といって、耕地を碁盤の目のように大きく区画し、縦横で「一条、二条」「一里、二里」というように順番に番号をつけて、その位置を表すようにしていました。条里の一边の長さは6町、約650mで、1町四方の中をさらに36等分していました。

多気郡の条里制は、櫛田川や丘陵のため、いくつかに分かれていました。「三疋田」「四疋田」の地名は、多気郡条里制の十六条目にあつた「三疋田里」「四疋田里」の名残です。

そのほか多気町には、「四神田」「五佐奈」「五桂」など、数字を付けた地名が多く見られますが、それらも古代の条里制による地名が今に残されたものです。



条里制 (多気町教育委員会提供)

- あなたの住んでいる地域の地名の由来について調べてみましょう。